

＜研究題目＞ アンサンブル感覚育成をめざした即興的音楽創作実践
～MMCP Interaction を基盤として～

＜目次＞

序論

- 第 1 節 問題の所在
- 第 2 節 先行研究
- 第 3 節 1. 研究目的
2. 研究方法および範囲

本論

- 第 1 章 MMCP の理論と構造
 - 第 1 節 背景
 - 第 2 節 つくられた過程
 - 第 3 節 基本理念
 - 第 4 節 MMCP プログラムの目的
 - 第 5 節 MMCP プログラムの構造
- 第 2 章 MMCP Interaction のカリキュラム
 - 第 1 節 Phase 1
 - (1) 内容 (2) 考察
 - 第 2 節 Phase 2
 - (1) 内容 (2) 考察
 - 第 3 節 Phase 3
 - (1) 内容 (2) 考察
 - 第 4 節 Phase 4
 - (1) 内容 (2) 考察
 - 第 5 節 Phase 5

- (1) 内容 (2) 考察
- 第 6 節 MMCP Interaction 全体を
通しての考察
- 第 3 章 MMCP のわが国の小学校での
実験的实践
 - 第 1 節 概要
 - (1) 目的 (2) 計画
 - 第 2 節 1 年 3 組での実践
 - (1) 学習指導案 (2) 実践 (3) 分析
 - 第 3 節 2 年 3 組での実践
 - (1) 学習指導案 (2) 実践 (3) 分析
 - 第 4 節 考察
 - (1) 成果 (2) 反省点

結論

- 第 1 節 まとめ
- 第 2 節 日本における実践の可能性
- 第 3 節 今後の展望
- 附録 1 MMCP Interaction の実践および 和
訳
- 附録 2 A Personal Retrospective on the
MMCP の全訳

＜研究の概要＞.....

(1) 目的

創造的音楽学習と歌唱や器楽などの音楽の他分野をつなぐ要素として「アンサンブル感覚」に注目し、1960 年代におけるアメリカ創造的音楽学習「MMCP Interaction」に基づく即興的音楽創作実践の提案と検証を試みること。

(2) 先行研究

◎日本の創造的音楽学習

- ・イギリスやカナダの流れをくんだもの
→アメリカの実践は行われていない
 - ・平成元年改訂の学習指導要領にもりこまれて 10 年経過
 - ・誰もが音楽のできる可能性を開いた⇔「めちゃくちゃな音も音楽」のような状況をも生み出した
- [日本の創造的音楽学習に欠如していること]
- ・教師が音に対して批判的に考えること
 - ・よりよい音や音楽を生み出そうとする姿勢

(3) 本論の研究内容

- ◎アメリカの創造的音楽学習
＝教育的側面と音楽的側面の結合
- ・1960 年代の「教育の現代化」
- ・アメリカ実験音楽

◎MMCP について

MMCP Interaction	幼稚園から小学校低学年を対象
MMCP Synthesis	小学校中学年から中学生を対象 ※ブルーナーのスパイラルカリキュラムの概念

- ・MMCP は、音楽的思考 (music thinking)、批判的な思考 (critical thinking) を形成するのに有効なプログラムである。
 - ◎MMCP Interaction について
 - ・音の探求活動をおこなうプログラム
- [重視していること]

- ・仲間とひとつの音楽をつくりあげること
- ・音楽をよりよいものにするためのアイディアを出し合っていくこと

段階	活動例	音楽的思考
Phase1	紙ボールまわし 音の違いさがし 音当てゲーム	音の生み出しかたを考える
Phase2	聞いて音まねゲーム	↓
Phase3	音づくりゲーム	音楽をつくりあげること
Phase4	音物語ゲーム	
Phase5	音の世界を広げる	

・Phase1、Phase2 という最初の段階から他の人と音を生み出す活動が多く含まれているので、この段階からアンサンブル感覚を育てることができるのではないかと考えた。また、Phase3 から Phase5 において即興的アンサンブル活動を通して音楽的に高めることを体験する活動ができるのではないだろうかと考えた。

◎実践（上越市立南本町小学校において実施）

[1年3組]11月22日実施

- ・Phase3の活動の題材の数が結果的に多くなった。
- ・題材を次々に変え、目先をうまく変えながら音楽的思考を持つ手助けをする必要がある

[2年3組]11月29日実施

- ・1年生より集中力が持ち、1つの問題に対してじっくり考えることができる
- ・仲間と協力しダイナミックなことをしようとする傾向

[アンサンブル感覚について]

・学年による差はみられるものの、おもしろいことを友達と共有してやりたい、という欲求の表れが共同の行動に表れる、ということがわかった。また、真似の行動は、テクニックの獲得の機会であると同時に、他人の表現のやり方を体験的に理解する機会

であることがわかった。

（４）結論

MMCP は音楽的思考を子どもたちにさせるプログラムである。それゆえ、指導者自身も音楽的思考をすることが必要になる。音楽とはなにか、この問いを教師自身が持ち続け授業を展開することで MMCP の日本における実践は可能であると考えられる。ただ、教員養成において音楽的思考を体験できるプログラムの設定など教師に対するサポートも必要であると考えられる。

アンサンブル感覚とは、二人以上で音楽をしようとするときに「友達と一緒にあわせてみよう」「一緒に音楽をしたい」のように感じる感覚のことである。そして、それはアンサンブルを実際につくり上げるときに必要な力の基礎となる。ともに音楽をつくりあげる喜びを感じることでできる場面は学校教育の音楽にある。これからの社会でコミュニケーション能力を高めることは重要である。アンサンブルも音楽におけるコミュニケーションと捉えることができる。アンサンブル感覚を育てるためには、まず、低学年のうちからアンサンブルの気持ちよさ・楽しさを体験させていくことが必要不可欠である。

そして、音楽の本質を、アンサンブル活動を通して体験的に理解するために、低学年のうちから MMCP プログラムのようなアンサンブル感覚を用いるような実践授業を展開していくことが必要だ。仲間とひとつの音楽をつくりあげることの喜びを感じられる、本質的に楽しい音楽授業を展開するために、教師は、音楽的思考を忘れてはならない。また、子どもたちの活動も音楽的思考を持った活動になるように支援することが大切である。

この有効なプログラムが今後何らかの形で広まっていくことを期待する。そのためにも MMCP 全体を翻訳する必要がある。

<参考文献>.....

Americole Biasini, Ronald Thomas, Lenore Pogonowski MMCP Interaction Media Materials, Inc. 1966

Lenore Pogonowski “A Personal Retrospective on the MMCP” Music Educators Journal, MENC 2001.7

小島律子『Manhattanville Music Curriculum Program の教育的意義—音楽的思考への着目—』大阪教育大学紀要第V部門第29巻第2・3号 p.133~146 1980.12